



青年期三島由紀夫の古典観 : 『学習院輔仁会雑誌』
から『文芸文化』へ

小林, 彩夏

(Citation)

日本文化論年報, 24:1*-36*

(Issue Date)

2021-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81012673>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012673>



青年期三島由紀夫の古典観

—『学習院輔仁会雑誌』から『文芸文化』へ—

小林 彩 夏

はじめに

戦後派の小説家である三島由紀夫（本名：平岡公威、1925-1970）は、1931年4月に学習院初等科に入学し1937年4月に中等科へ進学、その後は高等科へ進んだものの戦時における勤労働員の関係で修業年数の短縮が行われた¹ために1944年9月に学習院高等科を卒業した。後に東京帝国大学法学部へ進学し、卒業後は大蔵省へ勤めつつ作家として活動していたが、1948年に依願退職し本格的に創作活動に打ち込むようになった。1950年代からは『金閣寺』（1956年）等の作品を世に発表し、作家として名声を高めていった。さらに、1960年代に入ると政治的な発言を度々繰り返すようになり、その中で『憂国』（1961年）や『英霊の声』（1966年）を執筆した。そして、1970年には市ヶ谷の自衛隊駐屯地において、自らが結成した「楯の会」の会員である森田必勝らとともに総監の益田兼利を拘束し、総督室のバルコニーより自衛隊の違憲と憲法改正を唱えた後割腹自殺を遂げたことで世間に衝撃を与えた人物である。

こうした三島の行動については、彼の死後から様々な観点より議論が行われてきた。そのひとつとして三島の青年期の文学活動の開始地点、つまり日本浪漫派との関わりについて指摘されてきた。しかしながら、三島の文学的活動は必ずしも日本浪漫派からスタートしたわけではない。彼の文学活動は、それよりずっと以前に始まっていたのである。

三島は中等科時代から学習院の文芸部に所属し、校友誌である『学習院輔仁会雑誌』（以下、『輔仁会雑誌』）に、本名である平岡公威の名前で詩や短編小説などの作品を度々投稿していた。途中からは委員を務めるなど、文芸部の中心的メンバーであった。1941年9月には中等科の国語科教師であっ

1 学習院百年史編纂委員会『学習院百年史』第2編、1980年、451頁。

た清水文雄に誘われ、このとき初めて三島由紀夫のペンネームで国文学雑誌『文芸文化』に小説「花ざかりの森」を投稿した。この『文芸文化』は蓮田善明（1904-1945）、栗山理一（1909-1989）、清水文雄（1903-1998）、池田勉（1908-2002）の4名の同人²を中心とする「日本文学の会」が発行していた日本浪漫派系の雑誌である。『文芸文化』に三島の処女作といわれる「花ざかりの森」が投稿されたことや、蓮田が三島を「われわれ自身の年少者」として紹介したことからも、これまでの三島由紀夫研究、殊に三島の青年期に言及した研究においては、日本浪漫派との関係が指摘されているのである。高田瑞穂³や相原和邦⁴は三島の生前時点から、学習院時代の三島の作品には日本浪漫派との関係が認められることを指摘している。高田は『文芸文化』に掲載された三島の作品は「日本浪漫主義」であり、『文芸文化』と初期三島作品の思想は古典主義であると論じている。

小澤保博⁵は三島と古典の関係について触れ、『文芸文化』における三島の作品について「明白な古典の影響と全編に漂っている死の予感において際立っており、それ以前の作品とも又戦後の一連の作品とも一線を画している」という。しかしながら、小澤の指摘するような「死の予感」は、青年期の三島の作品からははっきりとは読み取れない。これについては後述するが、時

2 この『文芸文化』の4名の同人については、蓮田を除いた3名の研究はほとんど行われていないといってよい。また、『文芸文化』そのものの研究もさほど発展しておらず、日本浪漫派について考えるうえで今後明らかにすべき課題である。なお、蓮田善明については、これまで小高根二郎『蓮田善明とその死』（筑摩書房、1970年）を基に研究が進められてきた。近年では奥山文幸を中心とした研究会が立ち上げられ、坂本昌樹は「蓮田善明と保田興重郎」（奥山文幸編『蓮田善明論』翰林書房、2017年）において蓮田と保田の日本文学史観にはその対象と理念に違いがあることを明らかにした。茂木謙之介「蓮田善明と近代天皇」（奥山前掲）は蓮田の天皇観について、「神代」の連続性と「詩神としての天皇」を重要視したものであり、蓮田にとって日本の文学、歴史、天皇がそれぞれ相関関係にあったことを指摘し、蓮田の文学観や政治的思想が徐々に明らかになってきている段階である。

3 高田瑞穂「『文芸文化』の出会いと初期作品」（『国文学 解釈と鑑賞』第140号、1968年）。

4 相原和邦「三島文学と『文芸文化』」（『文学研究』第33号、1971年）。

5 小澤保博「昭和文学の展望（I）—『文芸文化』と三島由紀夫」（『琉球大学教育学部紀要』第1部、1979年）。

局のなかで三島は「死」と同時に「生」を強く意識して作品を執筆していた。

作品論では山田俊幸⁶が『文芸文化』に掲載された「わたくしの希ひは燃る」（1942年1月号）、「大詔」（1941年4月号）、「かの花野の露けさ」（1942年10月号）、「菊」（1942年12月号）の4篇の詩について分析を行った。山田はこれら三島の詩の特徴について、それ以前に書かれた「花ざかりの森」や日本浪漫派の世界構造と似通ったものと結論づけた。つまり三島が『文芸文化』に投稿していた詩は「花ざかりの森」と関連した意味のある作品であると考えられており、これらの作品のなかに三島が共通の認識を与えていたことを山田は指摘している。

また、柳川朋美⁷は、『文芸文化』1942年11月号に発表された短編小説「みのもの月」について分析を行った。柳川は、雑誌『文芸文化』は「時折素朴な戦争賛美の言葉を載せる以外は、時局に対してほとんど無関心とも言える態度をとり、国文学の伝統だけを審美的に追及していた」と述べ、「みのもの月」をはじめとする『文芸文化』の三島作品も、そうした政治的無関心や時局と文学を別物と扱う『文芸文化』独自の態度と共通した性格を持つと論じている。しかしながら、戦局の悪化が騒がれるなか、あえて紙面上で政治的な無関心を貫くのであれば、それは政治的な意見が反映されているといえるのではないか。『文芸文化』は日本の伝統を唱える評論が多数掲載されており、日本の歴史や伝統性を主張している点は、日本の優位性を主張する国家の動きとリンクしていると考えられることもでき、時局に無関心であるという柳川の論には肯首しかねる点がある。

このように、これまでの三島の青年期に言及した研究では『文芸文化』や「花ざかりの森」が中心となって議論が進められてきたが、こうした研究に疑問を呈したのが杉山欣也⁸である。杉山は、「花ざかりの森」が本来ならば文

6 山田俊幸「三島由紀夫初期詩篇にみられる認識構造」（日本文学研究資料刊行会編『三島由紀夫』有精堂出版、1971年。初出は、風信の会『風信』第6号、審美社、1971年）。

7 柳川朋美「三島由紀夫「みのもの月」論」（同志社大学国文学編『同志社国文学』第57号、2002年）。

8 杉山欣也『「三島由紀夫」の誕生』（翰林書房、2008年）。

芸部の発行する『輔仁会雑誌』に投稿される予定で書かれたものであり『文芸文化』に掲載されたのはタイミング良く清水に誘われたためであることを、三島の書簡を用いることで明らかにした。さらに、これまでの三島研究においてはほとんど検討されずにいた『輔仁会雑誌』の重要性を指摘し、『文芸文化』以外のメディアから当時の学習院や文芸部の様子、ひいては三島の過ごした環境について詳細な調査を行ったことで青年期の三島研究として一定の成果を残している。

以上のように青年期の三島の研究史について概観してきたが、ここで筆者の立場を明確にしておきたい。

これまでの三島由紀夫研究においては、一般的に後年の三島の発言や思想などが『文芸文化』や日本漫派との関わりから生じていると考えられている。三島自身も「私の遍歴時代」などの著作において学習院時代に日本浪漫派との繋がりがあったことについて言及しており、「花ざかりの森」の掲載に至る経緯は偶然であったとしても、当然青年期の三島を考えるうえで『文芸文化』の同人たちとの関係を全く無視することはできないだろう。しかしながら、三島が中高等科在学中に行った文筆活動の半分は学習院文芸部の『輔仁会雑誌』に収録されているということも見逃してはならない。『文芸文化』への投稿が開始される高等科のある時期まで、三島にとっての主な創作活動の場は『輔仁会雑誌』に限られていた。つまり、『文芸文化』のみでは青年期の三島について考えるには不十分であり、同時代に並行して作品を発表してきた『輔仁会雑誌』にも注目する必要がある。

そうした意味では杉山のいうように『輔仁会雑誌』の重要性は指摘されて然るべきであると考えるが、その場合『輔仁会雑誌』を重要視する杉山の論は、青年期の三島と1950年代以降に政治的な発言を繰り返すようになった三島との連続性について説明することが困難である。つまり、当時から複数のメディアに作品を投稿していた青年期の三島について『文芸文化』のみで考察するのは不十分であり、杉山のように『輔仁会雑誌』などの視点を用いることは必要であるが、同時に『文芸文化』と三島との関わりを軽く扱っては後の三島と整合性がとれなくなるという問題が生じてしまうのである。

むしろここで重要なのは、『輔仁会雑誌』と『文芸文化』という2つのメディ

アを、当時の三島がどのように捉えていたかという点ではないか。「花ざかりの森」が偶然『文芸文化』に掲載されてからは⁹、三島は『文芸文化』と『輔仁会雑誌』に並行して作品を投稿し続けている。「花ざかりの森」が掲載に至った偶然性を強調するのであれば、その後に『文芸文化』に投稿された作品はその延長で投稿されたものであって、日本浪漫派を意識したものではなかったのだろうか。

視点を変えれば、本来なら『輔仁会雑誌』に投稿される予定であった「花ざかりの森」がすでに日本浪漫派的な性格を持ち合わせていたのならば、『輔仁会雑誌』に掲載された他の三島作品からそうした要素を見出せるはずである。しかし、そうであればなぜ『輔仁会雑誌』だけが今日これほどまで注目されてこなかったのだろうか。

こうした疑問から、本論では『文芸文化』と『輔仁会雑誌』の2つのメディアを総体的に捉えることを試みる。これらの雑誌に投稿された作品に何らかの違いが見られるのか、そうであった場合に三島は『文芸文化』と『輔仁会雑誌』をどのように使い分けていたのかを明らかにしたい。これは青年期の三島について考えるうえで重要な手がかりになるだろう。それと同時に青年期の三島とそれ以降、すなわち50年代から60年代にかけての三島との関係について検討するための材料としたい。

なお、本論で扱う三島の史料については可能な限り原史料を用いる。理由としては、近年の三島研究で主に用いられている『決定版三島由紀夫全集』（新潮社）では、当時の三島周辺の状況を把握することができないためである。三島の周辺の状況や学習院全体の雰囲気をつかむためにも、原史料を利用することは有益であると考えられる。『輔仁会雑誌』は2017年に学習院大学にて調査を行った。『文芸文化』に関しては復刻版が刊行されているため、それを用いることとする。

9 同時期に『山樞』『まほろば』にも俳句やエッセイが掲載されているが、投稿回数が少ないことや投稿に連続性がないことなど、先の2つのメディアほど三島の青年期思想を考えるにあたっては重要ではないと思われることから本論では詳しく取り扱わないこととする。

第1節 『文芸文化』作品の特徴

『文芸文化』は日本浪漫派である蓮田善明、清水文雄、栗山理一、池田勉の4名の国文学者を中心とした「日本文学の会」より、1938年7月から1944年8月まで発行されていた国文学雑誌である。蓮田をはじめとした同人4名は広島高等師範学校と広島文理科大学で国文学者・斎藤清衛のもとで学んだ人物であった¹⁰。池田勉が記した「創刊の辞」にあるように、この『文芸文化』は「伝統をして自ら權威を以て語らしめ、我等はそれへの信賴を告白し、以て古典精神の指導に聴くべき」ことを目的とした雑誌であった。

三島の作品がはじめて『文芸文化』に掲載されたのは1941年9月に発行された第39号であり、その作品が彼の処女作といわれる「花ざかりの森」だったことは今日よく知られている。しかしながら、大久保典夫が指摘するように、この『文芸文化』という雑誌は「戦後派まったくその存在を抹殺され」ていた。『文芸文化』が人々の関心を集めたのは「三島由紀夫の自決という衝撃のニュースとともに、彼の思想・文学閱歴がさかんにジャーナリズムの話題になった」ことが理由である¹¹。つまり、三島の死後に、処女作である「花ざかりの森」が改めて注目された際に周知された雑誌であった。

三島研究におけるこの『文芸文化』は「三島文学の土壤であり、栄養素である『日本の古典文化』そのもの¹²」で、日本浪漫派同人に認められた¹³「花ざかりの森」が掲載されたことから三島と浪漫派の関係を繋ぐものとして位置づけられてきた。

しかしながら、杉山が明らかにしたように「花ざかりの森」は本来『文芸文化』に掲載することを予定して書かれたものではなかった。そのため「花

10 清水文雄「『文芸文化』創刊の頃」（太田靖編『復刻版『文芸文化』』別冊付録、雄松堂書店、1971年）。

11 大久保典夫「『文芸文化の位置—与重郎・善明・由紀夫—」（太田前掲『復刻版『文芸文化』』別冊付録）。

12 島内景二「雑誌「文芸文化」の世界—古典は常に新しい」（『国文学 解釈と鑑賞』第76巻4号、至文堂、2011年）。

13 「花ざかりの森」が掲載された『文芸文化』1941年9月第39号の編集後記において蓮田が「『花ざかりの森』の作者は全くの年少者である」が「我々自身の年少者」であり「悠久な日本の歴史の請し子」と三島について記述している。

「花ざかりの森」が書かれた時点においては日本浪漫派との密接な関係を見出すことは困難であると考えられるが、三島自身は自伝小説である『私の遍歴時代』（1963年）において青年期の三島が「日本浪漫派の周辺にいたことはたしか」であると述べていることから、『文芸文化』と日本浪漫派の存在抜きに三島の青年期を語ることはできない。

三島の作品が『文芸文化』に掲載されたのは、1941年9月から1944年8月までの全23号であり、「花ざかりの森」を皮切りにほぼ毎月のペースで何らかの作品が掲載されていた。これは三島が『文芸文化』にかなりの力を注いでいたことの表れでもあったといえよう。

山田俊幸は「かの花野の露けさ」（1942年10月号）を中心に『文芸文化』に掲載された三島の詩4篇について分析を行い、『文芸文化』の詩作品には「花ざかりの森」と共通の用語が含まれていることを明らかにした。「花ざかりの森」において「花咲くことはいのちの誕生」であると記した三島が、「かの花野の露けさ」においては花咲く時を“春”と表現している。これについて山田は、三島が「春＝花咲く＝いのちの誕生」という認識の同一化を行っていたことを指摘している¹⁴。

山田の分析は詩のみに留まっているが、三島のその他の『文芸文化』投稿作品からもそうした要素が認められることは注意しておく必要がある。1942年7月号に掲載された「古今の季節」は三島が『古今和歌集』について記したエッセイであるが、ここにも同一の認識が見られるとあってよいだろう。

三島は『古今和歌集』について「古今集を繙くごとに、ひとしおつよく感じられるのは、古今の歌人たちが季節にむかうその姿勢である」とし、俳諧が誕生してからは「歌のほうの季節はいつか軽んじられはじめていた」と述べる。そして「王朝にさかえた日記類」や和泉式部日記を例に挙げ、その時代を以下のように表している。

あのように文化なり文明なりの咲き誇った世の中でこそ、はじめて触れうる愁しみに触れた人の姿である。その叙景のすくない縷々と述べつづ

14 山田前掲「三島由紀夫初期詩篇にみられる認識構造」。

けられた心理の目録にも、季節の色あいはつよくにじみ出ている。行文のところどころに花咲いた歌のかずかずも、季節のかおりがただようているが、ときには季節へのおどろきからうかみ出ている。こうした事どもは、ただ日本文学の特質、ひいては日本人の国民性というような抽象されたこと葉で説かれてきたけれども、古今時代から糸をひいた季節のおもいは、なみなみならぬものがあるようにおもわれる¹⁵

つまり、「花咲いた歌」は「季節の色あい」や「季節のかおり」が感じられるものであり、その季節とは「あのように文化なり文明なりの咲き誇った」王朝の時代であったといえる。

さらに「花ざかりの森」と共通した「いのち」に関する記述も見られる。三島は歌に対して「『いのち』をふきこむすべは、かようにして古今の歌人がはじめてなしえ」たという。また、「季節はその『いのち』のみなもとである、ながれ、さかえ、花ひらくものすがたとして、ひたすらに待たれた」と述べる。このように、三島にとって王朝時代の歌や日記は「季節」によって「花咲く」ものであり、その「季節」は「『いのち』のみなもと」だったのである。

また三島は、1942年11月発行の第53号で「伊勢物語のこと」という短いエッセイを投稿した。

そこで三島は「ただ日本の詩文とは、句読も漢字もつかわれないべた一面の仮名文字のなかに何ら別して意識することなく神に近い一行がはさまれてゐること、古典のいのちはこういふところにはげしく煌めいていること、そうして真の詩人だけが秘されたる神の一行を書き得ること、こういふことだけを述べておけばよい」記している。

このように、「伊勢物語のこと」も「いのち」がキーワードとなっていることがわかる。さらに「べた一面の仮名文字」とは、「古典のうつくしき」を意味するものであろう。つまり三島のいう「古典」とは、仮名文字の栄えた王朝時代に「いのち」を見出すものであったと考えられる。

15 三島由紀夫「古今の季節」(『文芸文化』1942年7月第49号)。

ここで、山田の踏まえつつ、改めて全体の流れを整理しておきたい。三島は『文芸文化』に掲載された詩において「認識同一化」という目的で、「花咲く」「春」「いのち」などを、古典と結び付けて考えていた。さらに他のエッセイなどでも「季節」や「いのち」などを古典のみなもととして捉えていた。こうしたことから、『文芸文化』に掲載された三島作品は共通のキーワードを意識して書かれていたといえる。この共通の認識というものは『輔仁会雑誌』に掲載された作品からは見られない。

つまり三島は『文芸文化』に掲載するための作品に関して、雑誌の傾向を設定したうえで自らの古典観を組み込んでいたのではないだろうか。そしてその古典観とは「季節」が流れる中で「花咲く」古典の「いのち」であった。ここには小澤が『文芸文化』における三島作品の特徴として挙げる「全編に漂っている死の予感¹⁶」は読み取れない。むしろ、こうした「いのち」の「きらめき」や「花咲く」という語句は、読み手に「生」を連想させるワードではないか。

また「句読も漢字もつかわれないべた一面の仮名文字」という表現からは、古典を賛美し日本の優位性を主張すると同時に、英米や中国を批判していると考えられる。当時、三島自身は「非時局的な」人間になりたい欲望¹⁷を抱いていたことを文芸部の先輩である東隆宛の書簡に記している。後述するが、『輔仁会雑誌』の「編集後記」において「徒なアメリカニズム」といった表現や、『文芸文化』で英米中批判を行っていることから、むしろ時局に対して敏感な青年であったといえるだろう。

三島が『文芸文化』へ投稿を始めたのは1941年であったが、1937年からの日中戦争に引き続いて1941年12月には日米開戦が起こっている。国家総動員が唱えられる時代において、学習院の学生とはいえ戦争に無関心でいられる状況ではなかった。

三島自身も日米開戦前の1941年11月10日に、東に宛てて以下のような書簡を送っている。

16 小澤前掲、64頁。

17 平岡公威出 東健宛書簡1941年1月6日付（前掲『決定版三島由紀夫全集』第38巻、111頁）。

アメリカと戦争するらしいですが、もう時期は遅いでしょう。独乙はもうじきへたばりますし、英国と講和を結ぶかもしれません。まさか私は兵隊にとられないと思いますが、とられたらどうしましょう。いっそワットと戦争があって、一年くらいで終わってくれるといいのですが¹⁸

このように、10代の三島は開戦という状況を冷静に分析しつつも、徴兵されることに対する漠然とした不安を抱いていたのである。この2年後の1943年には学習院内からも学徒出陣が行われることとなり、18歳になる三島にとって出兵や「死が決して他人事といえる状況ではなくなっていた。

学徒出陣を受けて、1943年の『輔仁会雑誌』第169号には、学生による以下のような「感想」が掲載された。

愈々徴兵猶予の停止となり我々文科の学生は潔く筆を捨てて銃を取る。直接に醜の御楯となりて、大君の為に死ぬる時が今こそ来たのであった¹⁹

こうした状況下において、徴兵適齢期の若者が生死を意識するのはある意味当然のことであり、「死」や「生」への意識が強くなっていったと考えることはできないだろうか。『花ざかりの森』やそれ以降の「生」や「いのち」をテーマにした作品が、日米開戦の1941年以降に続いていることから、戦時という状況が三島の作品へ強く反映されていたといえるだろう。

第2節 『輔仁会雑誌』作品の特徴

三島由紀夫と『輔仁会雑誌』の関係について述べる前に、三島在学中の『輔仁会雑誌』の概要について説明しておきたい。なお『輔仁会雑誌』の作品は、すべて三島の本名である「平岡公威（俳名は青城）」の名前で掲載されてい

18 平岡公威出 東健宛書簡 1941年11月10日付（前掲『決定版三島由紀夫全集』第38巻、100頁）。

19 瀬川晶治「感想」（『学習院輔仁会雑誌』第169号 1943年12月、35頁）。

るが、本論では特別な場合を除き便宜上「三島由紀夫」として記述する。

『学習院輔仁会雑誌』は学習院が発行している校友誌であり、編集は学習院文芸部が行っていた。三島の作品が『輔仁会雑誌』に掲載されたのは、1937年7月に発行された第159号から、1943年12月に発行された第169号までの全11回である。

第159号から第166号までは主に春と秋の年に2回発行されていたが、1941年11月に発行された第167号からは、戦時で紙の調達が容易でなかったことなどの理由から年1回の発行に変更されている。

雑誌の内容に関しては、毎月文芸部の作品や授業の成果を発表する欄と学院の部活動の成果を報告する「部報告」の欄に分けられていた。さらに学院内で講演会があった場合にはその速記や、山岳部の写真や美術部の作品などが度々掲載されていたことが確認できる。

文芸部の作品については、投稿数が多かった場合は文芸部委員²⁰が掲載の可否を判断していたようである。『輔仁会雑誌』第167号の「編集後記」には、委員の前島清三郎が「本年から雑誌が年に一回発行となった為か原稿の集りが例年に比して多かったが、紙数の関係もあり幾分厳選した²¹」、同じく委員だった清岡得四郎も「大分集まった中から、これだけの作品を選んだ。皆それぞれ個性のある真面目な面白い作品ばかりだと思う²²」と記している。こうしたことから、個人投稿の作品に関しては文芸部委員が掲載作品を選別していたと考えて間違いないだろう。

『輔仁会雑誌』に作品を投稿していた当時、三島は中等科に在学中だった。第169号で投稿が止まっているのは『輔仁会雑誌』そのものが休刊に陥ったためである。例年通りならば、170号は1944年の冬ごろに発刊されていたはずであるが、それが出来なかったのも、おそらくは戦局の悪化により雑誌の発行が困難になったことが理由であると思われる。次号の第170号は戦後

20 この文芸部委員は、文芸部員のなかから毎年2名程度選出されていた。委員になると『輔仁会雑誌』の編集に本格的に携わり「編集後記」などの執筆も担当するようになった。

21 前島清三郎「編集後記」（『学習院輔仁会雑誌』第167号1941年12月、198頁）。

22 清岡得四郎「編集後記」（『学習院輔仁会雑誌』第167号1941年12月、199頁）。

に発行されたため、三島が学習院在学中に投稿したのもこの第169号が最後となった。

はじめにでも述べたように、三島は中等科時代から文芸部に所属していた。『輔仁会雑誌』に三島の本名である「平岡公威」の名前が登場したのは、1937年発行の第159号が最初であった。このときは「春草抄」という、授業内での課題を掲載する場と考えられている欄に「初等科時代の思い出」が掲載された。とはいえその他の学生の作文とまとめて掲載されたこの時点では、まだ文芸部の一員であったとは考えにくい。正式な入部時期は明らかにはなっていないが、おおよそその次号の第160号前後であるとされる²³。第160号以降の『輔仁会雑誌』には目次に平岡公威の名前が認められることから、文芸部への加入はほぼその時期だったと考えてよいだろう。

「初等科時代の思い出」掲載後には、詩「秋二題」(第160号)や短編小説「酸模」(第161号)をはじめ三島は『輔仁会雑誌』が休刊になる第169号まで毎号何らかの作品を投稿していた。本論ではすべての作品に触れるわけではないためそれぞれの作品については付録にて(資料①)確認されたいが、作品を見てみると三島は輔仁会雑誌に短編小説、戯曲、短歌や詩など多岐にわたるジャンルの作品を投稿していたことがわかる。さらにその後の1941年6月には文芸部委員に選出されており、第167号、第168号では「編集後記」も担当している。こうしたことから、三島が文芸部の中心的メンバーであったことが窺える。

次に『輔仁会雑誌』に掲載された三島の作品について見ておきたい。改めて作品を概観してみると、その中でも俳句・短歌や詩作品が多いことには注目しておく必要がある。

まず、それらの作品が掲載された号について確認しておく。俳句は第161号に4句、第164号に3句、短歌は第167号に4首、第168号に5首掲載された。俳句、短歌の創作に関しては学習院内での流行が影響していたと考えられる。三島の回想によれば「学習院では、そのころ大そう俳句がはやって²⁴」おり、

23 杉山前掲、86頁

24 三島由紀夫「恥」(佐藤秀明、井上隆史、山中武史編『決定版三島由紀夫全集』第28巻、200頁。初出は『青』1953年10月号)。

当時文芸部員でもあった波多野爽波を中心に、中等科で国文学を教えていた岩田九郎²⁵が主宰する「木犀会」という句会が結成されていた。第2回の木犀会句会で発表された句は岩田によって得点化²⁶され、高句点のものから順に『輔仁会雑誌』第164号に掲載されている。無得点だったために誌面上で省略されたものを除いたとしても、少なくとも13名の参加者がいたことが確認できる。

三島も1939年の時点では句会に参加していたものの、この後に句会と文芸部短歌派との間に派閥争いが生じ、三島は反句会派に転じていったようである。文芸部主催の歌会について述べた、同じ文芸部の先輩にあたる東健宛の書簡からそうした様子が読み取れる。

1941年1月26日付の書簡には、「輔仁会雑誌は今年から年一回になり、「十月」ごろ発行する予定らしいです。この十月が問題で、俳句側勝つか、反対派勝つかハッケ、ヨイヤです。前者が勝てば、俳句の驚くべき進出はおそらく免かれますまいし、俳句派に雑誌を占領されることにもなるわけです²⁷」と記されており、俳句派に誌面を割かれることに対して三島が拒否感を示していた。

さらに同年5月23日の書簡は、「二十六日には文芸部主催で歌会第一回をやります。どんなものですか。歌をつくったことのない僕には一寸新鮮な感じですよ²⁸」とある。ここからは、三島は歌会のためにはじめて短歌を作成したことがわかる。翌月の6月15日付の書簡によると「二十日頃、文芸部で第一回の歌会をひらきます。句会に対抗するつもりでしたが、どうやら句会の延長みたいになりそうです」ということから、この文芸部を中心とした歌会の目的は『輔仁会雑誌』第167号で俳句派に誌面を占領させないための対抗策であったことが窺える。

このように、第167号を境に三島の投稿する作品が俳句から短歌へ移り変

25 学習院編『学習院一覽』（1941年、207頁）。

26 H・N「編集後記」（『学習院輔仁会雑誌』第164号1939年11月、264頁）。

27 平岡公威出 東健宛書簡1941年1月26日付（前掲『決定版三島由紀夫全集』第38巻、新潮社、53頁）。

28 平岡公威出 東健宛書簡1941年7月10日付（前掲『決定版三島由紀夫全集』第38巻、72頁）。

わっているのは、『輔仁会雑誌』をめぐる派閥争いがあったことが影響していると考えられる。

次に詩作品について見てみよう。詩が掲載されたのは「秋二題」(第160号)、「金鈴」(第161号)、「鈴鹿抄」(第162号)、「九鳥官」(第163号)、「小曲集」(第165号)、「抒情詩集」(第167号)、「夜の蟬」(第169号)全7号である。

特に『文芸文化』に「花ざかりの森」が掲載された1941年以降の『輔仁会雑誌』には、5ページ以上の小説作品は第168号の「玉刻春」以外にはない。10ページを超えるような「酸模」、「館」(第164号)、「彩繪硝子」(第166号)、などの小説作品はすべて「花ざかりの森」以前に執筆されている。ちなみに、『輔仁会雑誌』への投稿枚数に関しては一応の規定はあったようだが、委員を務めていた三島によると「創作は枚数、五、六十枚ぐらゐまで結構²⁹」だったことから、枚数の制限は比較的緩やかなものだったとみてよいだろう。

それに対して『文芸文化』の投稿作品はどうだろうか。こちらも『輔仁会雑誌』同様にすべての作品名や掲載号は付録(資料②)で確認されたいが、三島は「花ざかりの森」以降継続的に『文芸文化』への投稿を続けていた。そこには「古今の季節」などのエッセイも多々みられるが、短編小説「みのもの月」(1942年11月号)や小説「世々に残さん」(1943年3月号～10月号)の連載など、文学作品を度々投稿していたことが確認できる。これは『輔仁会雑誌』において小説作品の投稿が減ってきた時期と重なっている。

つまり第1節で述べたように、「花ざかりの森」を境にして、三島の主要な作品投稿先が『輔仁会雑誌』から『文芸文化』へシフトしているのである。繰り返すが、「花ざかりの森」は作品を読んだ清水からの誘いがあったためであり、当時の三島が『文芸文化』の特色を理解して書かれたものではなかった。つまり、同時期の『輔仁会雑誌』からも第1節で述べたような作品の特徴や、日本浪漫派的な要素が見いだせる可能性があると考えられる。本節では「花ざかりの森」の直近に発行された、『輔仁会雑誌』第166号に掲載された「彩繪硝子」を例に、『輔仁会雑誌』と『文芸文化』の作品の連続性に

29 平岡公威出 東健宛書簡1941年7月10日付(前掲『決定版三島由紀夫全集』第38巻、78頁)

ついでにみていきたい。

田中美代子は「彩絵硝子」について「三島文学の死の主題の最初の現れ」であり、その理由について、三島が「彩絵硝子」を執筆する前後に祖父母の死が起こったことが影響した可能性を指摘している³⁰。作中で登場するのは、老退役中将である男爵宗方禎之介とその夫人秋子、そして夫妻に預けられる甥の狷之助と、狷之助と恋仲になる少女・則子の4名が中心だ。そして、その中で最も「死」という存在に接近している存在が老人である禎之介である。秋子と狷之助は、禎之介に忍び寄る「死」を予感し、それは作中に以下のように表現されている。

一時頑固にみえた彼（禎之介—筆者注）がきゅうにやさしくなったので、夫人も狷之助も少々気味がわるかった。珍らしく雨が一日じゅうふっていた午後宗方氏が留守で、夫人と甥とほんやりテラスの椅子にこしかけて氏の柔和さについて話をしていた。

と、不意に二人の間に期せずして宗方氏の死の予感がうかんだ。³¹

田中は、狷之助はその「死」の予感を「生」のイメージと交錯させているという。ここで用いられるのが以下の引用である。

彼女（則子—筆者注）は怪談のような少女だ。彼女の女をいろんな面からみるたびにあの羽根毛のように色が変わった。その色の一つが死に近いときであっても彼女にとってそれは生の色なのだ。

何かにまれ生の予感は死のそれよりも美しくかがやかしい。彼女をみるときいつも僕は、彼女の気持の反映で、自分のなかとうごめいている死の幻影を、生の幻影だと自分みせかけることが出来た³²

30 田中美代子「少年の闘い—「彩絵硝子」から—」（前掲『三島由紀夫と昭和十年代』、11頁）。

31 平岡公威「彩絵硝子」（『学習院輔仁会雑誌』1940年11月第166号、51頁—52頁）。

32 平岡前掲「彩絵硝子」49頁。

ここからはつまり、「死」というイメージと隣り合わせの存在にある「生」が認識されていることがわかる。さらに、三島はその「生」の予感に「美しさ」を見出しており、それを「かがやかしい」ものであると表現している。こうした「生」に美を感じ取る傾向は、この後に執筆される「花ざかりの森」をはじめとして『文芸文化』に掲載された作品に通じるものがあるといえよう。『文芸文化』に参加したことによって、三島が蓮田や保田与重郎などの日本浪漫派同人からも強い影響を受けていたことは、多くの先行研究が明らかにしてきたことではある。しかし、三島のなかで「死」や「生」が美化されていたのは浪漫派の影響ではなく、『文芸文化』に加わる以前の『輔仁会雑誌』に掲載されていた作品にもそうした傾向が見られる。時代や身の回りの出来事によって、「死」や「生」を意識するきっかけとなる対象は異なっても、それを認識して表現する方法には、『輔仁会雑誌』と『文芸文化』のなかで連続性があるといえるだろう。1941年頃から、三島の執筆の場は『輔仁会雑誌』から『文芸文化』へとシフトするが、その作品のなかにはすでに「死」と「生」に対する意識が存在していた。こうしたことから青年期の三島を考えるうえで、『輔仁会雑誌』と『文芸文化』を単独ではなく、連続性のあるものとして認識しておく必要があるといえる。

第3節 『輔仁会雑誌』から『文芸文化』への移行

ところで、なぜこのように『輔仁会雑誌』において投稿される作品の傾向に偏りが出ているのだろうか。短歌や俳句は先に述べた通りの事情で投稿していたのだとしても、文芸部委員として認められるためには、これまで通り『輔仁会雑誌』に小説を掲載していてもよいはずである。しかし三島は長編はおろか、その後は短編の小説すらほとんど掲載することなく、『輔仁会雑誌』のなかでの文筆活動は詩を中心に行った。以下では、三島が『輔仁会雑誌』をどのように捉えていたのかについて見ていくことで、その理由について考えたい。

結論からいえば、当時の三島は文芸部や『輔仁会雑誌』に何かと不満を抱いていたようである。その様子については東宛の書簡から読み取ることができる。

例えば、1941年11月16日付の書簡の一部は以下のようなものである。

輔仁会雑誌はまだ出来ません。じれったくて投げ出したくなります。文芸部はもう沢山です。

歌の会では村田さん（図書館嘱託職員の村田利明³³—筆者注）が相不変煮え切らないし。

覇気のようなものはどこにあるのでしょうか。僕が浪漫派を好きになりかかったのは、そんな反動でしょう。

ですが文芸世紀という下品なドイツ追従の雑誌をよんでその低級さと野蛮さに呆れました³⁴

1941年は三島が6月に文芸部委員に選出された年であった。これは文芸部委員として『輔仁会雑誌』の編集を務めていた時期であり、この書簡の日付から考えてもおそらく12月に発行される予定だった第167号について書かれたものであるとみて間違いない。それはつまり、三島が委員になって発行される初めての『輔仁会雑誌』であったことを意味している。

次に第167号発行後の、同年12月27日付の書簡を見てみよう。

輔仁会雑誌は全くのところ、出来がわるうございました。しかし有望なものの萌芽はいくらか窺われましょう。梅津さんのは御説のとおり、中五、高一、ぐらいの学生が小説を書きはじめると、結局ニキビ小説になつて了うのが、それをぬけだして、一先ずああいう題材にとびついたところに有望なものを見たわけでございます³⁵

こうした書簡の内容からわかるように委員として関わった『輔仁会雑誌』の内容は三島にとって決して満足のいくものではなかったようである。時期

33 前掲『学習院一覧』（218頁）。

34 平岡公威出 東健宛書簡 1941年11月16日付（前掲『決定版三島由紀夫全集』第38巻、103頁）。

35 平岡公威出 東健宛書簡 1941年12月27日付（同上、107頁）。

は前後するが、第 167 号の「編集後記」にもそうした不満が表れているので見ておきたい。

近ごろの風潮に便乗するわけではないが輔仁会雑誌と文芸部との衰退は取りも直さず古典の涸渇だと考えている。学習院のルネッサンスというものが叫ばれるならよろしく古典から出発すべきであるし又古典の復活という点で学習院ほど恰好な温床も少なからうと思う。藤原鎌足来の血に生きておられる諸君の内からこそ古典復活の旗が掲げらるべきであらう。徒らなアメリカニズムに酔うことは最近の本院の隠し難い病患ではなかったかどうか³⁶

このように『輔仁会雑誌』と文芸部に対して、学習院という場にながら古典を蔑ろにしているとの批判を行っている。さらに三島はその理由のひとつとして学習院そのものが「徒らなアメリカニズム」に酔っているためであるという。三島の指す「アメリカニズム」がどういうものなのかはこの「編集後記」では明らかにされていない。『輔仁会雑誌』に掲載されたその他学生作品からも「アメリカニズム」が見いだせるかと問われれば、必ずしもそうとは言い切れない。目次（資料③）を見てもわかるように、少なくとも露骨に「アメリカニズム」を押し出したような作品は確認できない。

もっとも先にも述べたように、この第 167 号は投稿数が多く、掲載されなかった作品も存在していたため「アメリカニズム」が表現された作品は文芸部委員によって意図的に掲載されなかった可能性も否定できないが、掲載不可となった作品に関しては現時点で確認することができないのでここでは追及しない。

むしろここで見逃してはならないのは、三島が文芸部と『輔仁会雑誌』が衰退しているのは「古典の涸渇」が原因であると同時に、学習院を「古典の復活」に最適な場であると捉えていたことである。しかしながら当時の学習院には、そうした「古典」を尊重する流れが見られなかったようである。こ

36 平岡公威「編集後記」（『学習院輔仁会雑誌』1941年12月第167号、201頁）。

こで三島のいう「古典」が具体的にどういったものなのかは、「アメリカニズム」と同様に明らかにされてはいない。

三島の「古典」についての言及は同年8月5日に東に宛てた書簡にみられる。そこには『和泉式部日記』をよみ、古典の美しくしさに再びこころをうばわれはじめました。古典のうつくしきはやっぱり仮名のうつくしきで、日本の活字は、漢字にくらべて仮名の方がずっとよくできていると思います³⁷』と記されている。これから考えれば、当時の三島が指していた「古典」とは「和泉式部日記」とあることから、仮名文字が発展した平安時代であったと考えられる。

しかしながら第167号発行時点の『輔仁会雑誌』を確認すると、現代ものの小説や科学的な分野についての論文、俳句や短歌は複数みられるが、平安文学をテーマにしたものは見られない。こうした『輔仁会雑誌』の傾向が、「古典」を重んじる三島にとって不満要素となっていたのではないか。校友誌である『輔仁会雑誌』の「編集後記」にそれらを記すということは学習院の生徒や教職員の多くに自らの考えを示すこととなる。三島は学習院関係者に読まれることを認識したうえで、この「編集後記」で衰退する学習院について発言したのである。それはつまり、三島自身が抱いていた不満を学校内の公の場ではっきりと提示したともいえる。

次に『文芸文化』に「花ざかりの森」が掲載されることが決まった時期の書簡も確認しておきたい。以下も1941年8月5日に東健宛に送られたものである。

－扱てこの間の「花ざかりの森」は、清水文雄先生（あなたは御存じでしょうか、バアマネントというあだ名の、中等科の国文の先生です）だの、松尾先生だのがやっつけられる雑誌にのせていただくことになったので、輔仁会雑誌には詩でも出そうかとおもっております。輔仁会雑誌にあの小説をのせるとすると、「その三」をどうしても不満のまま出さ

37 平岡公威出 東健宛書簡1941年8月5日付（前掲『決定版三島由紀夫全集』第38巻、83頁）。

なければならぬので実際どうしようかと迷っていたところでした³⁸

これを見ると、先行研究において杉山が指摘している「花ざかりの森」が『文芸文化』へ掲載された偶然性が明らかになっていると同時に、三島のなかの『輔仁会雑誌』の位置づけも見えてくるように思われる。この書簡を見る限り、三島は本来「花ざかりの森」を『輔仁会雑誌』に掲載しようと考えていたものの、『文芸文化』への掲載が決まったことで、その代わりに「『輔仁会雑誌』には詩でも出そう」というのである。

このとき「花ざかりの森」の代わりに掲載されたものが、先にも登場した「抒情詩集」であった。全集の年譜によれば、「抒情詩集」に含まれていた「小曲第三番」は1941年5月25日に作られたものである。『輔仁会雑誌』の第167号が発行されたのは12月であるため、その約半年前に作品は完成されていた。その他の「小曲第八番」も同年6月16日に完成しており、7月19日に擲筆した「花ざかりの森」より以前に作られていたものであったことが確認できる³⁹。つまり、三島が『輔仁会雑誌』に掲載した詩は「花ざかりの森」の代わりに新たに書き下ろされたものではなく、一部はそれ以前に作ったものを組み合わせて投稿していたのである。

詩に関していえば、三島は1940年に母の倭文重に連れられ詩人の川路柳虹のもとを訪れ、その後も不定期で詩の批評を受けるため訪問を続けていた⁴⁰。しかし以下にある1941年1月21日の東宛の書簡には、当初は川路との関係が決まってしまうくらいにいたわけではなかった様子がみとれる。また、三島が川路以外の作家とも関わりを持とうとしていたこともわかる。

作家には始め、一年か二年のころ叔父の友人の小島政二郎に原稿を送りましたが四ヶ月待って批評も何もなしに送り返され、知人の画家から石

38 平岡公威出 東健宛書簡1941年8月5日付（前掲『決定版三島由紀夫全集』第38巻、83頁）。

39 佐藤秀明、井上隆、山中武史編『決定版三島由紀夫全集』第42巻、新潮社、2005年、67頁－68頁 40 同上62頁。

40 同上62頁

森延男という人を紹介されましたが、全然誠意なく一、二回でやめ今度の川路もあのおりで、つくづく付き合い下手というか縁がないというか呆れたものです⁴¹

さらに、1941年7月には川路の紹介で詩人の萩原朔太郎を訪ね、自身の詩を雑誌『四季』⁴²に載せてくれるよう依頼した⁴³。結果として『四季』に三島の詩が掲載されることはなかったが、こうした動きからは三島が自らの意思で創作の場を学習院の外へ広げようとしていたことがわかる。つまり三島は『輔仁会雑誌』という学習院の関係者にのみ読まれる雑誌ではなく、他の文学者や作家との関わりを持つことによって、『輔仁会雑誌』よりも大きなメディアで自らの作品を発表する場を望んでいたのである。

そんな中『輔仁会雑誌』に様々な不満を抱いていた三島にとって、『文芸文化』という新たな作品掲載の場を得た後は『輔仁会雑誌』はさほど重要視すべき雑誌ではなかったのではないか。しかしながら文芸部委員という立場上、文芸部の一員として何らかの作品を掲載しなくてはならなかったはずである。そのため既製の詩や短歌など比較的創作の負担が少ないと考えられる作品を『輔仁会雑誌』には掲載し、広く読まれることを意識した『文芸文化』には連載作品などを執筆しながら掲載していたと考えられる。

おわりに

ここまで青年期の三島が主な文学活動の場としてきた『学習院輔仁会雑誌』と『文芸文化』の2つのメディアについてみてきた。

『輔仁会雑誌』は三島が文芸部で創作活動を本格化した当初は、継続的に作品を投稿できる主要な雑誌であった。しかしその後文芸部委員を務めるようになった彼にとって、『輔仁会雑誌』は次第に「うんざり」するような

41 平岡公威出 東健宛書簡1941年1月21日付(前掲『決定版三島由紀夫全集』第38巻、50頁)。

42 雑誌『四季』は堀辰雄、丸山薫、三好達治らの詩人を中心とした雑誌である。1933年に刊行された後、2度の休刊を経て1947年12月まで続いた。1936年以降からは萩原朔太郎や後に三島と交友関係を築く中原中也の作品も掲載されていた。

43 前掲『決定版三島由紀夫全集』第42巻、68頁。

多くの不満を抱えたものへと変化していった。そうした中『文芸文化』という新たな創作活動の場を手に入れた三島は、『輔仁会雑誌』には既製の詩や短歌など比較的創作の負担が少ない作品を投稿するようになっていったと考えられる。つまり「花ざかりの森」以降、『輔仁会雑誌』は三島にとってさほど重要視されている雑誌ではなかったと位置付けてよいだろう。

それに対して1941年以降に投稿を続けることになった『文芸文化』は並行して作品が掲載されていた『輔仁会雑誌』とは違った傾向が見て取れる。『文芸文化』に投稿された4篇の詩に加え、「古今の季節」や「伊勢物語のこと」などのエッセイからは三島の「死」や「生」に対する認識が明確に表れており、特定のキーワードを使用することで作品が構成されている。これはアジア・太平洋戦争が開戦し、三島自身が徴兵や「死」に対して漠然とした不安を抱えるようになったほか、『文芸文化』同人と接触し議論を重ねるなかで三島独自の「死」と「生」に対する意識が、彼の古典観とともに確立されてきたことを意味しているといえよう。

しかしながら、「死」や「生」に対する認識は『文芸文化』へ参加したことによって急速に芽生えたわけではなかった。1940年に『輔仁会雑誌』へ掲載された「彩絵硝子」で、すでに三島は「死」と「生」を並行して捉え、そこに美しさを見出していた。つまり、三島の中で「死」や「生」に対する意識は『文芸文化』以前から存在していたものであり、ここに『輔仁会雑誌』との連続性が見られるのである。「花ざかりの森」以降にみられる三島独自の表現は、文芸部時代にすでに見られるものであった。

このようなことから、青年期の三島について知るためには『輔仁会雑誌』と『文芸文化』をそれぞれ単独で考えるのではなく、同時期の三島の文章として連続性のあるものとして捉える必要がある。

そのほか、これら2つのメディアに共通していえるのは、戦時中という混沌とした時代に青年三島は時局に対して敏感であったということである。彼自身は「非時局的」な人間でありたいという思いを抱えながらも、その作品や発言の端々からは複雑な時代状況のなかで自らの意思を反映させていた。このように青年期に培われた三島の古典観や政治的状況を作品に反映させる傾向は戦時中に留まらず、後年の『憂国』や『英霊の聲』、『文化防衛論』と

いった小説や論説にも影響を与えたものであったと考えられる。そのような意味で、三島の青年期時代は後の三島由紀夫を構成するための重要な要素になっていたといえよう。

資料①『輔仁会雑誌』掲載作品一覧

年	月	タイトル	号数
1937年	7月	「初等科時代の思い出」	第159号
	12月	「斜陽」 「昼寝」 「秋二題」 「訝」	第160号
1938年	3月	「酸模」 「座禪物語」 「金鈴」 「一、光は普く漲り」 「二、金鈴」 「三、雨」 「四、短歌、三唱」 「五、海」 「六、墓場」 俳句4句	第161号
	7月	鈴鹿鈔 「墓参帰り 附 狸の信者」 「蜃気楼の国」 「月夜操練一上總一宮海岸にて」 「隕星」 「暁鐘聖歌一路加傳第四章より」	第162号
1939年	3月	「東の博士たち」(戯曲) 「森たち」 「第五の喇叭」 「独白 廢屋のなかの女」 「星座」 「九官鳥」	第163号
	11月	「館」(第1回) 「秋風や病める子」 「古き家の」 「百日紅」 「秋風に」	第164号

1940年	3月	小曲集（詩） 「Ⅰ、昼の館」 「Ⅱ、冬の朝の陽の光り」 「Ⅲ、不信」 「Ⅳ、倦怠」 「Ⅴ、花の闇」 「Ⅵ、或る朝」 「Ⅶ、薄化粧した…」	第165号
	11月	「彩絵硝子」	第166号
	12月	「抒情詩集」 「小曲第三番」 「小曲第八番」 「小曲第十番」 「小曲第十一番」 「小曲集第十二番」 「風の抑揚」 「附、馬とその序曲」 「序曲」「馬」 短歌4首 「藤棚の」 「草茂る」 「松の影のひきたる」 「秋雨の」	第167号
		「玉刻春」 短歌5首 「をさなかる…」 「みみのそこに…」 「せみのこゑ…」 「神のおそれ…」 「せみしぐれ…」	第168号
	12月	「Marchen von Mandala」 「夜の蝉」 「夢野乃鹿」 「東健児を哭す」	第169号

資料②『文芸文化』掲載作品一覧

年	月	タイトル	号数
1941年	9月	「花ざかり森」	第39号
	10月		第40号
	11月		第41号
	12月		第42号
1942年	1月	「わたくしの希いは熾る」	第43号
	4月	大詔	第46号
	7月	「古今の季節」	第49号
	10月	「かの花野の露けさ」	第52号
	11月	「みのもの月」 「伊勢物語のこと」(エッセイ)	第53号
	12月	「うたはあまねし」 「菊」	第54号
1943年	1月	「寿」	第55号
	3月	「世々に残さん」	第57号
	4月		第58号
	5月		第59号
	6月		第60号
	7月		第61号
	8月		第62号
	9月		第63号
	10月		第64号
	11月	「懸詞」(エッセイ)	第65語
	柳桜雑見録」	第66号	
1944年	1月	「古座の玉石—伊東静雄覚書」 (エッセイ)	第67号
	8月	「夜の車」	第70号

資料③ 『輔仁会雑誌』 159 - 169号 目次一覧

号数	タイトル	氏名・団体名	掲載頁
159号	口絵	山岳部	
	巻頭言	文芸部	1
	非餅屋的餅	賛成會員 渡辺末吾	2
	大田家の人達	覇田縁二	16
	空行く魂	岡村義夫	26
	向ふ三軒兩隣	戸澤秀壽	38
	別天地	多木祐造	52
	いたづら書	賛成會員 織田正信	67
	けんじやうらく	坊城俊民	73
	春草抄		81
	茂林寺の思ひ出	眞木長俊	90
	ソクラテスの哲學（出隆氏の講演要旨）	文芸部	94
	”POLAR-METHOD”による西穂高岳南山稜登攀記	山岳部 周布光兼、土田新一	99
	習志野乗馬演習記		139
各部報告		162	
編輯後記		191	
160号	巻頭言	文芸部	1
	鼠物語	賛成會員 戸澤富壽	2
	無題	賛成會員 古賀軍治	9
	詩と笑話	坊城俊民	19
	詩と笑話拾遺	坊城俊民	50
	近代繪畫と超現実主義	萩原良太郎	74
	三叉道	双川龍三	93
	小品三つ	覇田縁二	125
	落葉	土田新一	138
	絶句八首	賛成會員 佐藤文四郎	147
	飛行機	方土城 坊城戯那支	148
	銃後雜吟	戸島明二郎	149
	日記帳をくりて	平井修	150
	秋二題	平岡公威	150

	和歌 俳句	阪正紀	153
	夏以後の作	小澤駿龍	154
	各部報告		155
	編輯後記		237
161号	巻頭言	文芸部	1
	遊子多感	高嶺生	2
	貞雄の別居	萩原良太郎	6
	酸模	平岡公威	15
	異端者	文彦	25
	砂	坊城俊民	28
	ピエロ	方土城 坊城戲那支	33
	出征の友へ	平井修	36
	炭火	小澤駿龍	40
	中一句集		41
	金鈴	平岡公威	45
	座禅物語	平岡公威	50
	病床日記	菊池七郎	53
	或る夢	野津甫	57
	春草抄		59
	各部報告		67
	編輯後記		117
162号	人生と文藝（講演速記）	武者小路実篤	1
	僕の夢（講演速記）	兒島喜久雄	6
	二羽の雀	野津甫	20
	僕は黄金の燭臺を持つている	方土城 坊城戲那支	24
	音	徳川善恭	28
	事變の原因に對する一考察	安保清嗣	30
	探検事業の將來と日本	先輩 周布光兼	35
	のんびりと	前崎秋音	42
	朝	文彦	57
	鈴鹿抄	平岡公威	70
	各部報告		83
	編輯後記		145

163号	口絵	美術部	
	詩のラテイニズム	賛成會員 鍋島能弘	1
	幕末社會小考	土田新一	9
	土	賛成會員 金田鬼一	25
	作歌餘言	戸島明二郎	27
	初夏より晩春へ	賛成會員 松尾聰	30
	九官鳥	平岡公威	32
	秋三題	前島靈峯	41
	東の博士たち	平岡公威	44
	民爺さん	酒井洋	71
	蛇	徳川善恭	80
	子供達	坊城俊孝	90
	流星・流言の日記	文彦	97
	各部報告		111
編輯後記		227	
164号	口絵	美術部	
	共同部落小考	土田新一	1
	マリー・キユリー夫人	賛成會員 秋山峯三郎	29
	「幕末愛国歌」をめぐるて	賛成會員 清水文雄	41
	木犀會吟詠	木犀會	45
	狂想詩（愛するもの成遣す）	安東康喬	48
	行く雲	徳川善恭	58
	炎	坊城俊孝	71
	館	平岡公威	86
	出征の驛	清岡得四郎	118
	牧場と牛と青空	稻田植輝	121
	敬愛する先輩花房福次郎兄の戦士を悼む	柔道部	125
	花房君の少年時代	山岸徳平	126
	龜田弘之介君を悼む	土田新一 調所泰 橋口收	129

	鮮満旅行記	豊川昇 織田長繁 安場保雅 室町肇 古川敬二 田中光季 西郷道泰	138
	戦線だより		173
	各部報告		181
	編輯後記		264
165号	歴史教育の話	柳田國男	1
	形式主義的公理論の發見と其發展	安東康喬	12
	科學に於ける基礎原理の發見と其發展	木越邦彦	40
	思想の四季	安東康喬	62
	小曲集	平岡公威	69
	枯草	波多野爽波	73
	梅若忌	前島秋香	74
	荒野の連句	飯塚鄙路柿 安場能蟬 前島秋香	75
	輕氣球	坊城俊孝	87
	闇	東文彦	94
	吹雪	徳川善恭	103
	天邪鬼	野津甫	115
	部報		141
	編輯後記		203
166号	口繪	山岳部 美術部	
	粒子性と波動性	賛成會員 有山兼孝	1
	中支の旅	田敏夫 田英夫	5
	俳句	馬越愼思	13

	夏	郁郎	15
	麥の秋	波多野爽波	18
	白樺	清岡夢跡	18
	廻灯笼	前島秋香	19
	涼し	西郷芳翠	19
	僕達は子供ではない（戯曲）	野津甫	20
	彩繪硝子	平岡公威	38
	手帖に書きとめた小品集	清岡得四郎	56
	蛾	徳川善恭	67
	魔緑	東健	76
	各部報告		91
	編輯後記		156
167号	口繪	美術部	
	かつこう	徳川善恭	1
	戦争と動物生活の實相	賛成會員 戸澤富壽	3
	若い日（散文詩）	清岡志郎	7
	抒情詩抄	平岡公威	18
	詠草八題	波多野爽波 清岡夢跡 白仁曉峯 戸田鯛楡 鹽原光葩 西郷芳翠 飯塚ひろし 前島秋香	28
	花道	安保清嗣	32
	階段	梅津美一	49
	敏子	園池實覽	63
	爬蟲	東文彦	74
	回想	鍋島能弘	85
	嗚呼我が良友三井君	近衛道隆	86
	心静かに憶ふ	稻田植輝	88
	秋草集		91

	桐壺卷の解釋に關する研究	前島清三郎	96
	大學だより		114
	各部報告		119
	編輯後記		198
168号	卷頭言		
	伊勢路	賛成會員 山本修	3
	「十二月八日」以後	賛成會員 清水文雄	11
	我が先人一志賀氏に就いて一	増山正信	19
	古典について		28
	海生物とその飼育法	鍋島直誠	38
	晴岡集		49
	紫苑抄	波多野爽波	51
	夕焼	前島秋香	51
	時計一童詩抄一	清岡志郎	52
	夏雲の	新井高宗	55
	源五郎日記より	高斌	55
	文鳥	久我誠通	56
	霧の宿	清岡志郎	57
	おもかげ	安保清嗣	65
	出發	梅津美一	78
	玉刻春	平岡公威	97
	流	阪正紀	113
	編輯後記	新井高宗 平岡公威	116
	各部報告		121
169号	出陣學生諸子を送り在學生諸子に告ぐ	野村行一	5
	守困	豊川昇	8
	その後の事ども	古賀軍治	14
	志と道統	木越晃	19
	夢野乃鹿	平岡公威	32
	感想	瀬川晶治	35
	感想	千葉一夫	39

感想	佐藤晃一	44
馬鹿	木野盛幸	47
武士道断片より	柳生不二夫	53
東さんのこと	徳川善恭	58
東健兄を哭す	平岡公威	62
夜の蟬	平岡公威	65
源五郎日記より	高斌	66
野苺抄	阪正紀 戸田巨鹿	66
薔薇と守宮	徳川善恭	68
Märchen von Mandala	平岡公威	71
女精の踊	福田理	75
編輯後記		83
各部報告		87

資料④『輔仁会雑誌』『文芸文化』掲載一覧

年	月	タイトル	発表媒体	号数
1937年	7月	「初等科時代の思い出」	輔仁会雑誌	第159号
	12月	「斜陽」 「昼寝」 「秋二題」 「笈」	輔仁会雑誌	第160号
1938年	3月	「酸模」 「座禪物語」 「金鈴」 「一、光は普く漲り」 「二、金鈴」 「三、雨」 「四、短歌、三唱」 「五、海」 「六、墓場」 俳句4句	輔仁会雑誌	第161号
	7月	鈴鹿鈔 「墓参帰り 附 狸の信者」 「蜃気楼の国」 「月夜操練—上總—宮海岸にて」 「隕星」 「曉鐘聖歌—路加傳第四章より」	輔仁会雑誌	第162号
1939年	3月	「東の博士たち」(戯曲) 「森たち」 「第五の喇叭」 「独白 廢屋のなかの女」 「星座」(詩) 「九官鳥」(詩)	輔仁会雑誌	第163号
	11月	「館」(第1回) 「秋風や病める子」 「古き家の」 「百日紅」 「秋風に」	輔仁会雑誌	第164号

1940年	3月	小曲集（詩） 「Ⅰ、昼の館」 「Ⅱ、冬の朝の陽の光り」 「Ⅲ、不信」「Ⅳ、倦怠」 「Ⅴ、花の闇」「Ⅵ、或る朝」 「Ⅶ、薄化粧した…」	輔仁会雑誌	第165号
	11月	「彩絵硝子」	輔仁会雑誌	第166号
1941年	9月 10月 11月 12月	「花ざかりの森」	文藝文化	第39号 第40号 第41号 第42号
	12月	抒情詩集 「小曲第三番」 「小曲第八番」 「小曲第十番」 「小曲第十一番」 「小曲第十二番」 「風の抑揚」 「附、馬とその序曲」 「序曲」「馬」 短歌4首 「藤棚の」「草茂る」 「松の影のひきたる」「秋雨の」	輔仁会雑誌	第167号
1942年	1月	「わたくしの希いは熾る」	文藝文化	第43号
	4月	大詔	文藝文化	第46号
	7月	「古今の季節」	文藝文化	第49号
	10月	「かの花野の露けさ」	文藝文化	第52号
	11月	「みのもの月」 「伊勢物語のこと」（エッセイ）	文藝文化	第53号
	12月	「うたはあまねし」 「菊」	文藝文化	第54号

		「玉刻春」 「をさなかる…」 「みみのそこに…」 「せみのこゑ…」 「神のおそれ…」 「せみしぐれ…」	輔仁会雑誌	第 168 号
1943 年	1 月	「寿」	文藝文化	第 55 号
	3 月 4 月 5 月 6 月 7 月 8 月 9 月 10 月	「世々に残さん」	文藝文化	第 57 号 第 58 号 第 59 号 第 60 号 第 61 号 第 62 号 第 63 号 第 64 号
	11 月	「懸詞」(エッセイ)	文藝文化	第 65 号
	12 月	「Marchen von Mandala」 「夜の蟬」 「夢野乃鹿」 「東健兄を哭す」	輔仁会雑誌	第 169 号
		柳桜雑見録」	文藝文化	第 66 号
1944 年	1 月	「古座の玉石—伊東静雄覚書」 (エッセイ)	文藝文化	第 67 号
	8 月	「夜の車」	文藝文化	第 70 号